

小学校高学年における 友達からの受容感と規範意識に関する一考察

長期研修員 西 川 潔

Nishikawa Kiyoshi

要 旨

「子どもの規範意識の向上をめざして」（「子どもの規範意識向上推進委員会」奈良県、平成23年3月）は、規範意識を醸成・向上させるためのアプローチとして、豊かな人間関係の構築を提言している。本研究では、小学校高学年児童における友人関係の実態と規範意識の実態及び両者の関係性を明らかにするため、友達からの受容感と規範意識についてのアンケート調査を実施し、分析・検討を行った。その結果、友達からの受容感が高まれば規範意識も高まることが示唆された。

キーワード： 友達からの受容感、規範意識、友人関係

1 はじめに

「子どもの規範意識の向上をめざして」（「子どもの規範意識向上推進委員会」奈良県、平成23年3月）は、規範と規範意識の関係性について、「生徒指導の観点からは、規範を『人間が行動したり判断したりする時に従うべき価値判断の基準』と捉え、『そのような規範を守り、それに基づいて判断したり行動したりしようとする意識』が規範意識であると考えられる。」と述べている。また、教育心理学小辞典（有斐閣、1991年）によると、規範とは、「集団成員によって共有される規則・期待をいう。その圧力の主要な源は、同意（合意）と、期待の強さである。」と定義されている。この定義に従うと、児童の規範意識は学級集団内における友人からの同意や期待の影響を受けると考えられる。

そこで、本研究では、小学校高学年学級集団内における児童の友人関係と規範意識についての調査を行い、その実態及び関係性を分析・検討する。

2 研究目的

小学校高学年児童における学級集団内での友人関係と児童の規範意識に関わるアンケート調査を実施する。その結果を基に、友人関係と規範意識に関わる児童の心理特性に焦点を当てた分析・考察を行い、規範意識を向上させるための方途を探る。

3 研究方法

- (1) 友達からの受容感と規範意識についてのアンケート調査
- (2) 友達からの受容感と規範意識についてのアンケート結果の分析と検討
- (3) 児童の心理特性についての考察

4 研究内容

(1) 友達からの受容感と規範意識についてのアンケート調査

西川（2000）は、友達からの受容感尺度を作成し、これによるアンケート調査結果の分析から、①作成した友達からの受容感尺度に妥当性が認められること、②友達から受けとめられていると感じている児童・生徒ほど、自分についての全般的な有能感が高くなること、③友達から受けとめられていると感じている児童・生徒ほど、ある課題を自分の力で効果的に処理できるととらえる傾向が強いこと、④友達からの受容感は、自己価値及び効力感の予測に必要であること、⑤友達からの受容感は、高い自己価値の維持に影響を及ぼしていることが示唆された。

他方、規範意識に関しては、「都市化や少子化、情報化などが進展する中で、社会全体で様々な課題が生じており、また、児童生徒の問題行動等の背景には、規範意識や倫理観の低下が関係しているとも指摘されています。」と述べられている（『生徒指導提要』文部科学省、平成22年3月）。また、「暴力行為等の発生から見られる子どもたちの規範意識の低下は、人々が安心して暮らせるよりよい社会をつくっていくためにはもとより、子どもたちの健全やかな成長を促し、子どもたちを自立した社会人に育てるため、看過できない問題である。」と提言されている（「子どもたちの規範意識向上推進委員会」奈良県、平成23年3月）。

上述のように、児童・生徒の心理的諸特性に影響を及ぼしている友達からの受容感、子どもたちの規範意識にも影響を及ぼしていると考えられる。そこで本研究では、友人関係と規範意識に関わる児童の心理特性に焦点を当てた分析・考察を行い、規範意識を向上させるための方途を探るため、以下に示すアンケート調査を実施した。

ア 調査対象

調査対象は、奈良県内の公立小学校A及びBの2校に在籍する4年生34名（男子17名、女子17名）、5年生49名（男子26名、女子23名）、6年生42名（男子16名、女子26名）であった。（ただし、不備があった5年生男子1名のデータについては分析対象から除いた。）

イ 調査実施期間

A小学校、2012年5月15日。B小学校、2012年5月21日、22日、24日。

ウ 調査材料

(7) 友達からの受容感についての調査

調査尺度は、前述の西川（2000）を用いた。この尺度は、表1に示す13項目から構成されており、現在の自分について、「当てはまる（4点）」「どちらかと言えば、当てはまる（3点）」「どちらかと言えば、当てはまらない（2点）」「当てはまらない（1点）」の4件法で回答させた。得点範囲は、13点～52点である。（質問9は逆転項目である。）

表1 友達からの受容感尺度の項目

- | | |
|---|----------------------------------|
| 1 | クラスの友達は、ぼく（わたし）に気軽に話をしてくれると思う |
| 2 | こまったとき、話を聞いてくれるクラスの友達がいると思う |
| 3 | クラスの友達は、ぼく（わたし）のことを気にかけてくれていると思う |
| 4 | クラスの友達は、ぼく（わたし）にやさしいと思う |
| 5 | クラスの友達と、本音（本当の気持ち）で話をするができると思う |
| 6 | クラスの友達から、頼りにされていると思う |
| 7 | クラスの友達といっしょにいと、楽しいと思う |

- 8 クラスの友達は、ぼく（わたし）の気持ちを分かってくれていると思う
- 9 クラスの友達から、相手にされないことがあると思う
- 10 クラスの友達といっしょにいと、安心できると思う
- 11 何か失敗しても、クラスの友達は、あたたかく見守ってくれていると思う
- 12 ぼく（わたし）が転校したら、悲しむクラスの友達がいると思う
- 13 クラスの友達は、ぼく（わたし）の良いところや悪いところを分かってくれていると思う

(イ) 規範意識についての調査

調査尺度は、平成22年度全国学力・学習状況調査、児童質問紙（文部科学省、平成22年4月）のうち、表2に示す7項目を抽出して用いた。(ア)と同様に4件法で回答させた。得点範囲は、7点～28点である。

表2 規範意識の項目

1	学校のきまりを守っている
2	友達との約束を守っている
3	人が困っているときは、進んで助けている
4	近所の人に会ったときは、あいさつをしている
5	人の気持ちが分かる人間になりたいと思う
6	いじめは、どんな理由があってもいけないことだと思う
7	人の役に立つ人間になりたいと思う

エ 手続き

実施に際しては、各学級担任が学級単位で実施した。実施順は、①規範意識についての調査、②友達からの受容感についての調査の順で行った。なお、回答の仕方については、それぞれの調査の紹介の部分に明示した。

(2) 友達からの受容感と規範意識についてのアンケート結果の分析と検討

ア 友達からの受容感の発達の変化及び性差

友達からの受容感得点のデータを用いて、発達の変化及び性差について検討した。図1は、友達からの受容感得点の平均値を学年別・男女別に示したものである。学年と性による受容感の違いを明らかにするために、それぞれの得点ごとに学年×性の2要因分散分析を行った。その結果、表3に示すように、小学校高学年児童においては、男子よりも女子の方が友達からの受容感が有意に高い傾向にあることが明らかになった ($p < .05$)。また、本調査においては、学年と性の要因が相互に影響を及ぼし合い ($p < .05$)、4年生では女子児童よりも男子児童の方が友達からの受容感が高くなっている。

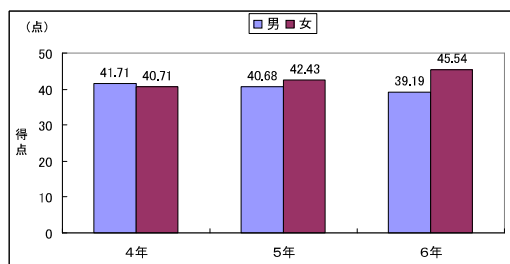


図1 友達からの受容感学年男女別平均値

表3 友達からの受容感分散分析のp値

○学年間 p 値	p=0.48n. s.
○男女間 p 値	p=0.02*
○学年と性の相互影響 p 値	p=0.04*

not significant: 非有意 (n. s. と略す)
* $p < .05$

イ 規範意識

(7) 規範意識の全質問項目

図2は、規範意識全項目の平均値を示したものである。平均値の差について分析を行った結果、表4に示すように、①は③を除く全ての項目より有意に平均値が低く ($p < .01$)、③は①を除く全ての項目より有意に平均値が低かった ($p < .01$)。

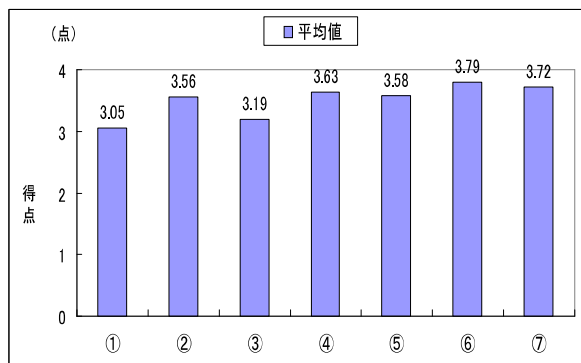


図2 規範意識全項目平均値

表4 規範意識各項目間の平均値の差と棄却値

	①	③	($p < .05$)	($p < .01$)
①	—	0.14n. s.	0.28	0.32
②	-0.51**	-0.37**	0.28	0.32
③	-0.14n. s.	—	0.28	0.32
④	-0.58**	-0.44**	0.28	0.32
⑤	-0.53**	-0.39**	0.28	0.32
⑥	-0.74**	-0.60**	0.28	0.32
⑦	-0.67**	-0.53**	0.28	0.32

n. s. (非有意), ** $p < .01$

(イ) 規範意識の発達的变化及び性差

規範意識得点のデータを用いて、発達的变化及び性差について検討した。図3は、規範意識得点の平均値を学年別・男女別に示したものである。学年と性による規範意識の違いを明らかにするために、それぞれの得点ごとに学年×性の2要因分散分析を行った。その結果、表5に示すように、学年 ($p < .01$) と性 ($p < .01$) の主効果があり、学年差及び性差のあることが分かった。そこで、どの群間に差があるかをみるため、多重比較検定を行った結果 (表6)、4年生女子の平均値と5年生男子の平均値に有意差があり ($p < .05$)、5年生男子よりも4年生女子の方が規範意識が高かった。

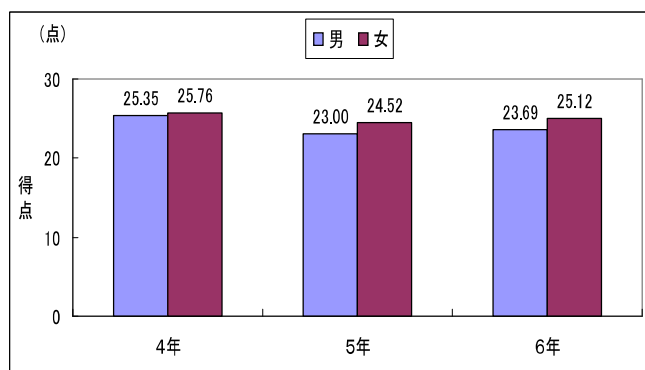


図3 規範意識学年男女別平均値

表5 規範意識分散分析のp値

○学年間p値	$p = 0.008^{**}$
○男女間p値	$p = 0.006^{**}$
○学年と性の相互影響p値	$p = 0.56$ n. s.

n. s. (非有意) ** $p < .01$

表6 群間の平均値の差と棄却値

4年女子と5年男子	棄却値 ($p < .05$)
	2.76*
	2.61

* $p < .05$

(ウ) 規範意識の各質問項目ごとの性差

各質問項目ごとのデータを用いて、性差について検討した。図4は、規範意識得点の平均値を各質問項目別・男女別に示したものである。各質問項目ごとに男女の平均値についての分析を行った。その結果、表7に示すように、質問項目③の「人が困っているときは、進んで助けている。」の平均値の差が有意 ($p < .01$) で、男子よりも女子の方が項目得点が高かった。また、質問項目⑥の「いじめは、どんな理由があってもいけないことだと思う。」の平均値の差が有意 ($p < .05$) で、男子よりも女子の方が項目得点が高かった。

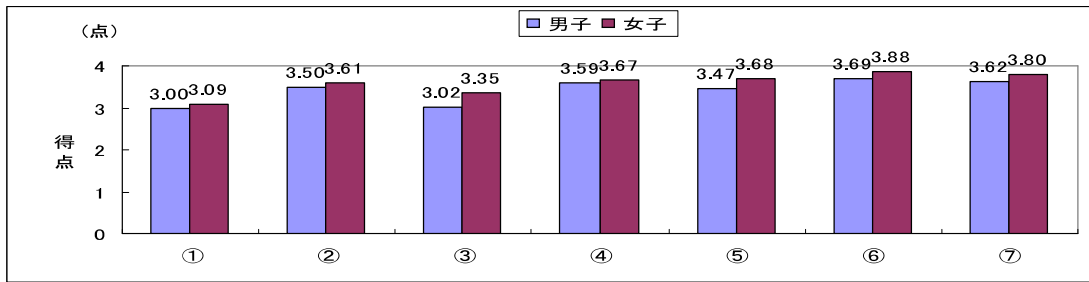


図4 規範意識各質問項目ごとの男女別平均値

表7 規範意識各質問項目ごとの男女差の検定

質問項目	男女平均値の差	自由度	t 値	p 値 (両側確率)	t (0.975)
①	-0.09	105.17	-0.78	0.44n. s.	1.983
②	-0.11	122.00	-1.03	0.31n. s.	1.980
③	-0.33	122.00	-2.94	0.004**	1.980
④	-0.08	103.01	-0.65	0.51n. s.	1.983
⑤	-0.21	122.00	-1.73	0.09n. s.	1.980
⑥	-0.19	92.04	-2.33	0.02*	1.986
⑦	-0.18	110.94	-1.70	0.09n. s.	1.982

n. s. (非有意), *p<.05, **p<.01

※ 各質問項目ごとに規範意識男女別得点の分散が等しいか検定を実施。等分散とみなせる項目 (②③⑤) については、スチューデントの t 検定を、等分散とみなせない項目 (①④⑥⑦) については、ウェルチの t 検定を実施した。

(E) 規範意識の因子

規範意識 7 項目について因子の分析を行った。その結果、3 因子 (説明率は全分散の47%) が抽出された。因子 I が「こうありたい規範意識 (項目番号: ⑤⑥⑦)」、因子 II が「守れていない規範意識 (項目番号: ①③④)」、因子 III が「友達との約束因子 (項目番号: ②)」である。

ウ 友達からの受容感と規範意識

(7) 友達からの受容感低中高群別規範意識

友達からの受容感全得点の平均値は42点、中央値は43点であること、群間人数の偏りを最小限にすることを考慮し、友達からの受容感得点の総計が、17点から39点の者36名を友達からの受容感低群 (以下「低群」と言う。)、40点から44点の者41名を友達からの受容感中群 (以下「中群」と言う。)、45点から52点の者47名を友達からの受容感高群 (以下「高群」と言う。) として抽出した。図5は、群ごとの規範意識の平均値を示したものである。

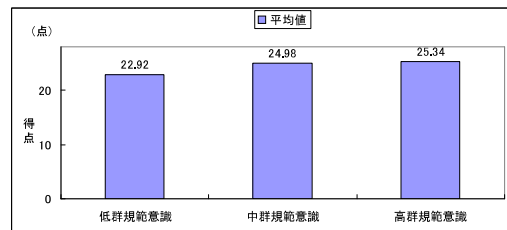


図5 友達からの受容感低中高群別規範意識の平均値

表8 友達からの受容感各群間規範意識の平均値の差と棄却値

群	平均値の差	(p<.05)	(p<.01)
低群と中群	-2.06**	1.36	1.69
低群と高群	-2.42**	1.31	1.64
中群と高群	-0.36n. s.	1.27	1.58

n. s. (非有意), *p<.05, **p<.01

平均値の差について分析を行った結果、表8に示すように、低群は中群及び高群より有意に規範意識が低かった (p<.01)。

(イ) 友達からの受容感と規範意識の関係性

a 友達からの受容感からの規範意識の予測

図6は、友達からの受容感得点を横軸に、規範意識得点を縦軸にとり、全データの散らばり具合を示したものである。友達からの受容感から規範意識を予測するために、友達からの受容感を説明変数、規範意識を目的変数とする回帰分析を行った。その結果、回帰直線は有意であった ($p=2 \times 10^{-7}$, $p < .01$)。

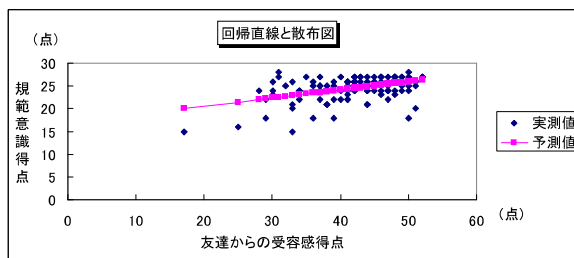


図6 友達からの受容感と規範意識の散布図

b 友達からの受容感が規範意識に及ぼす影響

友達からの受容感13項目について因子の分析を行った結果、4因子（説明率は全分散の54%）が抽出された。因子Ⅰが「疎外されている因子（項目番号：①②③⑧⑬）」、因子Ⅱが「安心できる因子（項目番号：④⑩⑪）」、因子Ⅲが「存在感因子（項目番号：⑥⑨⑫）」、因子Ⅳが「何でも話せて楽しい因子（項目番号：⑤⑦）」である。これらの4因子が規範意識に及ぼす影響の度合を分析するため、友達からの受容感4因子を説明変数、規範意識を目的変数とする重回帰分析を行った。その結果、表9に示すように、「疎外されている因子」の影響が最も大きかった ($p < .05$)。

表9 友達からの受容感4因子を説明変数、規範意識を目的変数とする重回帰分析

友達からの受容感因子	規範意識	p 値
因子Ⅰ：疎外されている因子	$\beta = .31*$	0.02
因子Ⅱ：安心できる因子	$\beta = -.01n. s.$	0.96
因子Ⅲ：存在感因子	$\beta = .04n. s.$	0.68
因子Ⅳ：何でも話せて楽しい因子	$\beta = .20*$	0.047
-----	-----	-----
回帰式の分散分析 (F値)	8.51**	0.000045

n. s. (非有意), * $p < .05$, ** $p < .01$

※ β は標準偏回帰係数。目的変数に与える影響の大きさを示す。

(3) 児童の心理特性についての考察

ア 友人関係の発達の变化及び性差

「児童・生徒の他者からの受容感に関する研究」(西川、2000)は、小学校5・6年生を対象に調査を実施し、「男子よりも女子の方が友達からの受容感が高いこと」を示している。

「児童期における友人関係の発達」(國枝・古橋、2006)は、小学校2・4・6年生を対象として友人関係の発達に関する調査を行った。その結果、「友達との関係性については、秘密を話す経験の増加や友達の重要性の高まりが男子では学年が上がるにつれて段階的に見られたのに対して、女子では4年生で顕著に見られた。」こと、さらに、「女子では2年生から4年生にかけて友達との関係性が深まり、友達の仲良しグループのような、特定の友達とのより親密な付き合いが見られるようになる。」ことを示している。

「児童中期・後期の友だち集団関係性が社会的スキルの発達に及ぼす効果(2) 一性差の検討」(堂野、2011)は、小学校4・5年生を対象に友達の集団関係性に関する調査を行った。その結果、「小学校中学年(4年生)から高学年(5年生)にかけての友達関係性には性差がみられた。つまり男子では、両学年ともに、特定の友だちやグループのメンバーと

の関係性を大切にし、友だちに気を遣いながら関わることを特徴とする①『やさしさ志向』型、また、友達といつも一緒にいることを好み、しかも深刻さを回避して楽しさを求めるなどを特徴とする③『群れ志向』型がそれぞれ多い。一方女子では、両学年とも①型が5割～4割を占め最も多いが、③型については4年生では1割を切り最も少ないものの、5年生になると3割近くへと漸増傾向を示していた。」と述べている。

本研究で示した、小学校高学年児童において、女子の方が友達からの受容感が高い傾向にあることは、先行研究で示された「友人関係における性差」が影響していると考えられる。つまり、女子児童は、4年生期には友達とのより親密な付き合いから「仲良しグループ」を形成し、5年生期になると、深刻さを回避して楽しさを求める『群れ志向』型が漸増傾向を示している。この友達関係性の変化が友達からの受容感を高める一因になっていると考えられる。さらに、5・6年生期には、思春期前期に入り精神的な発達をみせ、気の合う友達を軸に密度の濃い友人関係を形成し、友達からの受容感を高めていく。一方、男子児童は、4年生期ではまだ幼児性が残っており、遊びやゲームなどを通して、『やさしさ志向』型及び『群れ志向』型の友人関係を形成する。そのため、友達からの受容感が高いと考えられる。5年生期になると、体の発育と幼児性を残した精神的な発達の遅れとのアンバランスによる不安定さから他への攻撃性が増し、友達とのトラブルを生み出すことも多い。しかし、男子児童は、女子児童のように友達関係性を変化させることがないため、5年生・6年生期の友達からの受容感が徐々に低下するのではないかと考えられる。

また、本研究の結果からは、友達からの受容感に学年と性が相互に影響していることが見い出された。4年生期には女子児童の友達からの受容感よりも、男子児童の友達からの受容感の方が高い傾向となっている。これは、4年生期女子児童の「仲良しグループ」において、グループ間で対立したり、グループの構成員を奪い合ったりする傾向があり、このことが友達からの受容感を低める一因になっているのではないかと考えられる。

イ 児童の規範意識

(7) 優先される「友達との約束」

本研究において、規範意識の因子を分析したところ、項目②の「友達との約束を守っている。」が独立した因子として抽出された。このことは、子どもたちにとって、友達が「特別な存在」であることを示している。一方、規範意識全項目の平均値の分析からは、①「学校のきまりを守っている。」の項目が③「人が困っているときは、進んで助けている。」を除く全ての項目より低いことが明らかになった。子どもたちにとって、友達が特別な存在として大切にされている反面、公のきまりを守ることは軽んじられているのである。

先行研究（河村、2007）は、ルール遵守に関して、「自分の都合や身近な『友達』への気づかいなどの私的な部分が、公的な『決まり』より優先され、学級全体の雰囲気になる危険性がある」と述べている。

アンケート調査校の教員からも、「仲間であるために、悪いこともしてしまう。」「きまりより友達が優先される。」「限定的な友達関係の中でしか助け合わない。」「友達関係の維持が最優先され、自分たちのルールが大人の与えたルールを超えている。」等の声が聞かれた。

(イ) 「進んで助けて」いない児童の実態

規範意識全項目の平均値の分析から、③「人が困っているときは、進んで助けている。」の項目が、①「学校のきまりを守っている。」を除く全ての項目より低いことが明らかにな

った。⑦で「人の役に立つ人間になりたい。」とは思っているが、実際には、「人が困っているときには、進んで助けて」いないという児童の実態がうかがえる。

(ウ) 規範意識の発達の变化及び性差

西川（2000）は、小学生・中学生を対象に、他者（友達・先生・家族）からの受容感と向社会性との関連性の調査を行った。その結果、他者からの受容感が高いほど向社会性が強いことを示すとともに、友達からの受容感が向社会性を予測することを指摘している。

先行研究「廣岡・横矢、（2006）」は、小学生・中学生・高校生の規範意識の実態を明らかにするための調査を行った。その結果、児童・生徒の規範意識は、①発達の段階との関連においては、学年が上がるにつれて低下していくこと、②性差との関連においては、男子は学年が上がるにつれ意識が低下すること、③規範意識の種類によって、男子と女子ではその低下する様子が異なっていることを明らかにした。「例えば、男子の規範意識の特徴は、違法行為や暴力行為に対して許容的であるが、女子は遊びや快楽を追究した行動に対して許容的であった。」と論じている。

本研究における規範意識の平均値からみると、①発達の段階においては、4年生時が高く、以後低下する傾向があること、②性差においては、男子の規範意識が低下する傾向があることは、先行研究との一致がみられる。さらに本研究では、どの群間に有意差があるかを見い出すため、各学年男女ごとの規範意識平均値の多重比較検定を行った。その結果、5年生男子の規範意識よりも、4年生女子の規範意識の方が有意に高いことが明らかになった。これらのことは、小学校高学年児童においては、4年生から5年生へと成長する段階において、学年が上がることにより規範意識が低下する「発達の变化」と、女子よりも男子の方が規範意識が低下する「性差」が生じることを示唆しており、管見の限りでは、先行研究にはみられなかった具体的な学年段階（4年生から5年生）での規範意識の変化を見い出すことができたと言える。以上のことから、規範意識醸成のための取組を4年生で意図的に実施していくことが必要であると考えられる。

規範意識の種類によって規範意識の低下に性差があるという先行研究の結果から、規範意識を質問項目ごと分析し、性差を検討した。その結果、「人が困っているときは、進んで助けている。」の項目で、男子よりも女子の方が平均値が高かった。女子の方が友達からの受容感が高く、それに伴って向社会性も高くなっているためであると考えられる。また、「いじめは、どんな理由があってもいけないことだと思う。」の項目では、男子よりも女子の方が平均値が高かった。これは、「男子の規範意識の特徴は、違法行為や暴力行為に対しては許容的である。」という先行研究の結果と関連していると考えられ、アンケート実施校の高学年担任から、5年生男子児童に学級や学校のきまりを守らない行動がみられる実態が指摘されている。

ウ 友達からの受容感と規範意識の関係性

(7) 規範意識と受容感の相互関連性

本研究において、友達からの受容感低中高群別に規範意識を分析した結果、友達からの受容感低群児童は、友達からの受容感中群及び友達からの受容感高群児童よりも規範意識が低いことが明らかになった。

また、宮城県教育相談グループ（2007年度）は、小学生を対象に、「家の人は、あなたの気持ちをよく分かってくれていると思う。」「学校には、あなたの気持ちを分かってくれる

先生がいると思う。」「学校には、あなたの気持ちを分かってくれる友達がいると思う。」等、家の人、先生、友達からの受容感に関する調査と「ルールを守らないことは悪いことだと思う。」「暴力はいけないことだと思う。」等、規範意識に関する調査を実施した。その結果、友達からの受容感と規範意識に相関を見い出している。そして、「児童生徒の規範意識の醸成には、『信頼感』に含まれる『家族や友達のあたたかさ』を実感できる、受容されている意識をはぐくむことが大切であると思われる。」と述べている。

これらのことから、「規範意識」と「友達からの受容感」は、お互いに影響を及ぼし合っていると言える。

(4) 「規範意識」を予測する「友達からの受容感」

本研究では、「規範意識」と「友達からの受容感」の因果関係を検討するために、「友達からの受容感」を説明変数、「規範意識」を目的変数とする回帰分析を行った。その結果、回帰直線は予測に役立つことが明らかになった。すなわち、「友達からの受容感」から「規範意識」を予測することが可能であると考えられる。

さらに、友達からの受容感因子（「疎外されている因子」、「安心できる因子」、「存在感因子」、「何でも話せて楽しい因子」）のうちどの因子が規範意識に最も影響を及ぼすのかを検討するため、各受容感因子を説明変数、規範意識を目的変数とする重回帰分析を行った。その結果、「疎外されている因子」が規範意識に最も影響を及ぼすことが分かった。すなわち、友達からの疎外感を排除することで、規範意識が高まると考えられる。

また、「みやぎの子供の規範意識をはぐくむための一考察—児童生徒への意識・実態調査結果の分析を通して—」（宮城県教育相談研究グループ、平成19年度）は、「学校にはあなたの気持ちを分かってくれる友達がいると思う。」の質問項目で高い得点数値を示した児童の規範意識が高いことを見いだしている。

以上のことから、友達からの受容感を高めることが規範意識の醸成につながる大切な部分であると考えられる。

5 おわりに

本研究では、小学校高学年児童における学級内での友達関係の在り方が規範意識に影響を及ぼしていることを明らかにした。したがって、学校現場では、「友達とつながること」の大切さを児童に体験的に気付かせ、結び付きを強めるための指導方法の工夫が必要となる。

西川（2000）は、小学校4年生（男子10名、女子11名）を調査対象として、構成的グループ・エンカウンター（Structured Group Encounter:以下、SGEと略す。）の実施に伴う友達からの受容感の変化を検討した。SGE実施前、SGE実施中、SGE実施後の計3回にわたって友達からの受容感の測定を行った結果、調査の1回目より2回目の方が、更に2回目よりも3回目の方が、友達からの受容感が高くなっていた。このことから、SGEの実施回数が増加するのに伴って、児童の友達からの受容感が高まっていったと考えられる。

本研究のアンケート調査実施校で、4年生（17名）・5年生（21名）を対象として、「いつも身近にいる学級の友達との関わりを意識化する」ことをねらいとしたSGEを実施した。

表10に示すように、「あなたは、クラスのみなどと楽しく過ごすことができましたか？」という振り返りアンケートに対して、「たいへんよくできた」「できた」と回答した児童が大半を占め、「どちらとも言えない」と回答した児童は1名、「あまりできなかった」「ぜんぜんできなかった」と回答した児童はいなかった。この結果から、SGEという手法が児童に受け入れられたと考えてよいだろう。

表10 「あなたは、クラスのみなどと楽しく過ごすことができましたか？」

	4年生	5年生
たいへんよくできた	15人	16人
できた	2人	4人
どちらとも言えない	0人	1人
あまりできなかった	0人	0人
ぜんぜんできなかった	0人	0人

また、「今日したことの中で、一番心に残っているのはどんなことですか？」という振り返りアンケートに対しては、次のような回答を得た。「目などで『今からパスするよ』など、気持ち伝わるんだと思いました。」「人は見方を変えればちがうふうに見えることもわかった。」「後ろ向きに歩くとこわいし、だれが受け止めてくれるだろうかとドキドキした。」(以上、4年生)。「ふだんいっしょに遊んでいない人と、4びょうしで名前を言い合ったのが楽しかった。」「女の子にも安心してボールを投げることができた。」「私はボール役になったとき、友達がちゃんと受け止めてくれると思っていたけど、ちょっと不安でした。でも、受け止めてもらったら、だいじょうぶでした。」「仲の悪い人のいいところも見つけられた。」「男女一緒にしたので不安だったけど、これもいい経験だと思いました。」(以上、5年生)。

このように、楽しく友達と触れ合う体験をした後に、「今ここで」の自分の気持ちをはっきり自覚させることは、友達や自分に対する新しい「気付き」を生み出していることが分かる。

SGEを意図的・計画的に実践することで、子どもたちの友達からの受容感を高め、規範意識の醸成につなげていきたい。

参考・引用文献

- (1) 「子どもの規範意識向上推進委員会」奈良県（平成23年3月）「子どもの規範意識の向上をめざして」 pp.1-4
- (2) 三宅和夫・北尾倫彦・小嶋秀夫 編（1991）『教育心理学小辞典』有斐閣 p.66
- (3) 西川 潔（2000）「児童・生徒の他者からの受容感に関する研究」奈良教育大学大学院教育学研究科修士論文 pp.1-62
- (4) 文部科学省（平成22年3月）『生徒指導提要』 まえがき
- (5) 文部科学省（平成22年4月）『平成22年度全国学力・学習状況調査、児童質問紙』 p16
- (6) 國枝幹子・古橋啓介（2006）「児童期における友人関係の発達」福岡県立大学人間社会学部紀要 Vol.15.No.1 pp.105-118
- (7) 堂野恵子（2011）「児童中期・後期の友だち集団関係性が社会的スキルの発達に及ぼす効果(2)－性差の検討－」安田女子大学紀要 39 pp.87-94
- (8) 河村茂雄（2007）『データが語る②子どもの実態』図書文化 p.27
- (9) 廣岡秀一・横矢祥代（2006）「小学生・中学生・高校生の規範意識と関連する要因の分析」三重大学教育学部研究紀要.自然科学・人文科学・社会科学・教育科学.57 pp.111-118
- (10) 宮城県教育相談研究グループ（2007年度）「みやぎの子供の規範意識をはぐくむための一考察－児童生徒への意識・実態調査結果の分析を通して－」 pp.5-20,ダイジェスト版